



第7295号

2021年7月21日(水)

街を襲った黒い土砂

防災システム研究所所長 山村武彦

◆大規模盛土は5万カ所

昨年3月、国土交通省は全国5万1306カ所の大規模盛土造成地マップを公表した。盛土には「谷埋め型」と、斜面に盛土して平地を造る「腹付け型」がある。谷埋め型の場合、盛土面積が3千平方メートル以上、腹付け型では盛土前の地盤面に対する角度が20度以上かつ盛土高さ5メートル以上を大規模盛土造成地としている。

このマップに記載されていた静岡県熱海市伊豆山の盛土は角度と高さで指定されていた。静岡県によると、2009年当時、土地を所有していた業者が熱海市に届け出た盛土計画は、3万6600立方メートル、高さ15メートルだった。しかし、20年の計測では約5万4000立方メートル、高さ約50メートルに増えていたという。

その盛土が土石流となって街を襲った。長雨は続いてしたが、猛烈な降雨ではなかった。排水設備が適切であれば、降水量の少ない時間帯に盛土内の水は排出でき、崩壊せず土石流も発生しなかったと思われる。

◆地鳴りと一緒に土石流

7月3日午前10時30分頃、熱海市伊豆山の逢初川(あいぞめがわ)源頭部にあたる標高約390メートル地点を起点に土石流が発生。斜度11度の斜面を大量の土砂が流れ下り、国道135号線を突っ切って熱海港に達した。

7月19日現在、この土石流による死者・行方不明者は計28人、建物被害131棟という甚大被害となった。土石流の動画を撮影した人は「地鳴りのような音がして、黒い土砂が建物や車をのみ込んでいった。あつという間だった」と話している。

5日後に現地に入ったが、これまでに見てきた土石流とは異質の現場だった。例えば14年の広島土砂災害の時、当日ヘリで上空から俯瞰(ふかん)すると、阿武山の斜面には数えきれないほど土石流の爪痕が残されていた。大雨による大規模土石流が起きると、その周辺で同時多発的に土石流や水害が発生するのが常だが、今回は単独の盛土土石流という特異性が際立つ。今後の因果検証にもよるが、盛土の土地所有者はもとより看過してきた行政の責任は重い。

◆手作業主体の搜索活動

搜索現場は大量の土砂や流木が堆積する狭隘(きょうあい)斜面。大型重機が使えないため、水を含んだ粘性の高い土砂に腰までつきながら、スコップ、バケツなどで泥をかき出す手作業が主体の活動だ。「上部で崩落あり、作業中止、安全ゾーンへの緊急待避」の指示が出ると、深く重い泥濘(ぬいじよう)の中を麓まで急いで避難。再開の合図で再び斜面や階段を登っていく。その上、高温多湿下のマスク着用作業が体力消耗に拍車を掛ける。私が現地に行った3日間だけでも、7回も作業中止の指示が出されるほど、2次災害リスクの極めて高い現場だった。

こうした悪条件の中、今も消防、警察、自衛隊などによる懸命の安否不明者搜索が続いている。熱海市消防本部の植田宜孝消防長に聞くと、一刻も早く助け出したいという使命感は非常に強く、長期戦でも隊員たちの士気は極めて高いという。職務とはいえ、命を賭した高潔なレスキュー魂に頭が下がる。

1日の活動が終わり、薄暮の中、泥だらけで引き上げてくる隊員たちの足取りには疲労感が漂う。東京五輪の開幕前。できることなら、彼らの胸にも金メダルをかけてほしいと思う。

(やまむら・たけひこ)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111 (代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003